

俺のブレンドは間違っていない

せつな

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡はある日親戚の秋月紅葉さんに臨時のバイトを頼まれる。

そこで出会うは個性的だが優しい？面々

その優しさに触れた八幡は…

目次

ドSと腐り目	1
新たな出会い？という名の苦勞	5
店長はやはり働かない	9
趣味仲間	12
新たに加わる仲間	16
新たな才能と変態とぼっち	20
ぼっちの初仕事とドSの夢	25
俺がときめくわけがない	29
会議とスイーツ	34
スイーツ対抗戦	39
友達としてなら… 前編	42
友達としてなら… 後編	45
密かに芽生えた想い	50
18禁とお姉さん	53

ドSと腐り目

トゥルルル♪ トゥルルル♪

ある休日の朝 キッチンにて妹の小町のためとしぶしぶながらも昼御飯を作っているトリピングで電話が鳴っていた。

「おーいっ！小町今手が離せないから変わりに出てくれ」

「んー？ごめんお兄ちゃん今小町も忙しくて無理 お兄ちゃん出て」

そう言っていた妹だがソファアで寝転がりながらテレビを見ていた。つまりただ単に電話でたくないわけね…

仕方ないので火を止めてからリビングにある受話器を取ることにした。

「はい、もしもし比企谷です」

「ああやつと繋がったか…遅いぞ八幡！」

その声は！

「ああ秋月さん！お久しぶりです。仕方ないですよさつきお昼作ってたんですから…

いつもは小町が作ってくれているんですけど、受験勉強も最近頑張っているようなので今日くらいはと思ひまして」

「ああそうなのか すまんな！」

「いえいいですよ」

今俺が電話している相手は親戚の秋月紅葉さんだ 俺より4歳上の兄みたいな人だ。

昔に秋月さんの家に家族で呼ばれた歳にゲーム好きというところで意気投合し、今でもたまに一緒に秋葉原へ行ったりなどする。（その際にいつも兄弟と間違われる そんなに似てるか？）ただお願いですから同人誌即売会などには誘わないで欲しい（汗）

「それで秋月さん 今日はどうしたんですか？」

秋月さんは最近忙しかつたようではしばらくは電話してこなかった。その秋月さんが久しぶりにかけてくるって一体…

「ああ実はそのことなんだがな…

八幡一緒に喫茶店で働かないか？」

な、何故かいきなり勧誘されてしまった…っじゃなくて

「またいきなりで…何かあったんですか？」

「実はな…」

秋月さんの話を要約すると

今秋月さんはある喫茶店で働いているんだが一緒にキッチンをや
るはずのその店の店長がまったく働かないのでさすがに痺れを切ら
して「店長がキッチンやらないから俺の負担でかいわ！今度の日曜料
理出来る親戚連れてくるから考えとけよ！」と言ったらしい

「そんなわけでさ…頼む！八幡なら料理出来るだろ？っでしかもちや
んと働いてくれそうだからな…俺が気を使わなくて楽だし」

間違いなく最後の俺が選ばれた理由な気がする

実は秋月さんは隠れヲタクで外では気を張りながら過ごしている
ようなのだ。(隠しているみたいだが小町や親戚中には知られてい
る)

「こつちから頼んでるんだからやりたくないならそれでもいいんだが
…ダメか？」

「いえ…秋月さんの頼みですから出来ることなら働いてもいいですが
…正直はたらきたくないです」

「最後に言ったのが本心みたいだが…まあとりあえずお試しでいいか
ら来てくれ」

「まあ…それくらいなら…」

「すまん 恩に着る 喫茶店の名前は「ステイール」って名前だ。今
から地図送るから明日来てみてくれ頼んだ」

そう言うなり電話が切れた。

秋月さんにはああはいつたが正直働きたくはない むしろ働いた
ら負けだと思っている。そこ！勝手に引きこもり谷って呼ばない！

昔のあだ名にあったわ (泣)

「あれ？お兄ちゃん誰からだったの？」

リビングに戻るなり小町が電話の要件を聞いてきた

「いや…秋月さん立ったんだが…アルバイトに誘われた…」

「へー…お兄ちゃんが自ら働くなんて小町的にポイント高いよ」

「いや…自分からは働きたくはない 秋月さんに誘われたからな…仕方なくだ」

「まったくホントごみいちゃんなんだから！小町的に一気にポイント下がったよ」

そのポイント溜めると何があるのか八幡気になります！

「それでそのバイトはいつからなの？」

「ええっと…明日からみたいだな」

ついさつき地図のかかれた画像が送られてきていて最後に

「伝え忘れていたが明日の日曜頼むな」と送られてきていた。

「まあ…キッチンだろうからあまり秋月さんに迷惑かけちゃダメだよ」

「さすがに迷惑はかけないって大丈夫だぞ…タブン」ぼそぼそ

「なんか最後のは聞こえなかったけどまあ頑張ってね小町応援してるからー」

そう小町には満面の笑顔で言われた。ヤバい天使だ…やつぱりうちの妹は可愛い！

side OUT

莓香 side IN

「ま、また落ちてしまいました」がくつ

「ま、莓香ちゃんしつかり！」

私桜ノ宮莓香は生まれつき目付きが悪く なかなかアルバイト先が見つかりません…でも私は諦めません！

そうなぜなら…

いつか海外留学へ行くため！

新たな出会い？という名の苦勞

秋月さんから電話をもらった翌日　　つまりは日曜だ…

憂鬱だ…朝からという話ではなかったので日朝キッズアニメ見れたのは良かったが…

「お兄ちゃんもこれでお母さんたちみたいになるのかな？」

つと出かける前の小町の一言により気分が…

だってあれですよ！両親⇨社畜ってイメージしかあと父親不憫っていうことしか…（また小町にお小遣い渡していたようで財布を見て少し泣いていた…ざまあつ）そう考えてしまおうと自分の将来⇨社畜ってことに

働きたくないでござる…あと将来社畜でなく家を守る守護神という名の專業主夫になりたい。

そんなことをぐだぐだと言ってたために小町に強制的に家を追い出された。（泣）

そんなことを考えながらも時間的に少し早めに着くくらいなので店へと向かっている…

軽く腹部に痛みがきたと思ったらなにやら小さい子にぶつかっていた。

sideOUT

麻冬sideIN

私はいつものように日朝キッズアニメを見ていたのだがいきなり店長から電話が入りなにやら新しくバイトが来るようなことを言っていた。（正直アニメを優先したので話し半分聞き流していたが…）そして電話が終わりアニメも終わったので時間的に余裕を持って家を出たのだが…

「なんでこんな時に電車遅れてるのよ！これじゃあギリギリになる

じゃない」

私はこれでも…そうこれでも一応成人している。

今余計なこと考えた人後で校舎裏ね ニコッ♪

っじゃなくて！成人している私はいつも余裕を持って仕事場に着くようにしているのだ…これ社会人として常識よ。 その私が遅刻ギリギリなど…店長のこと言えなくなるじゃない！

しばらくするとオリンピック予定の駅に着いたので少しはや歩きで店へと向かっていた

「これならなんとか…」

そんなことを考えていて前を見ていなかったからなのか…目の前から男の人が来てることに気づけなくて そのまま当たってしまった。

「きゃっ！」

さすがに男の人もびっくりしていたようだが私のほうがぶつかった衝撃が強くそのまま頭から倒れそうだった

さすがに痛みを覚悟していたが…しばらくすると少しの浮遊感を感じた私がおそった

「あの…大丈夫？」

そう聞かれその男の人の顔を見ると…

「頭とかぶってないか？ごめんな」

職場の同僚の人と似た顔をしていた。ただ違うのはこの人は少し目が腐っていた。

麻冬 side OUT

八幡 side IN

当たったひょうしにその子が倒れそうだったので慌てて手を掴むつもりが…身体のほうを抱き上げてしまっていた。や、ヤバイ(汗)これ泣かれないかな？…っていうか捕まるかも(泣)

そんなことを考えながらもけがとかないか心配だったのでその子に確認した

「あの…大丈夫か？」

そう聞いた時のその子の顔は恐怖というよりびっくりしたという表情をしていた

「頭とかぶってないか?ごめんな」

さすがにこちらが悪かったので謝ると

「いえ…こちらも前をよく見ていなかったの…ごめんなさい けがとかは特にないので大丈夫よ」

そう返しながらけががないことをアピールしていた。なんか大人びたしやべり方する子だなあ…下手したら小町よりも大人だわ

「あの…」

変なことを考えているとその子に呼ばれたので向くと

「いい加減降ろして欲しいのだけれど?それとも警察呼びましょうか?」手には防犯ブザー

「も、申し訳ありません!すぐに降ろしますのでそれはご勘弁をっ!!」
急いでその子を降ろした。さすがに警察に呼ばれるのは勘弁願う
…間違いなく有罪にされる(泣)

「ありがとう。今回はこちらにも非があるから勘弁してあげるわ
あと私急いでいるのでこれで」

そう言っ歩いていってしまった まあけがしてないっていうことなら大丈夫か…

そのあとは何事もなく秋月さんからもらった地図に書いてある店に着いた。

「えーつと「ステイール」ここだよな?」

店の外観は今のよくある喫茶店みたいに明るい色をしていた。俺なんか凄い場違い感が…

「まあ…やるとしてもキッチンだろうから…」

そう自分を納得させ恐る恐る店内に入ると

「お帰りなさいお兄ちゃん♪」

さつきあつた子にお兄ちゃんと呼ばれていた。えっ!な、なんでだ?
?

「あれ?さつき会ったお兄ちゃんだ。今日はよく合うね」

さつきとあまりにも口調が違うことにさすがに驚いていると…

「おっ！八幡やつときたかすまんな とりあえず休憩所で待つてくれ」

そう言いながら奥から秋月さんが出てきた。

「あつ…麻冬さん そいつ新しくバイトしてもらおう予定の俺の親戚の比企谷八幡って言うんですけど…店長まだ来てないみたいですしませんがバックヤードに案内してもらってもいいですか？」

それを聞くなり

「あら？お客さんじゃないのね。なら仕事モード切つても良さそうね。じゃあその…えーっと比企谷くん？だったかしらこつちに来てもらっていいかしら？」

あつそつちが素ですか…

そんなことを考えていると…

「ああ そういえば…言っておくけど私貴方より年上だから間違えても年下扱いしないようにね？」

そんなことを振り向きながら言われた

えっ！ま、マジですかー（汗）

八幡がステイールに訪れている時…桜ノ宮苺香も運命のような出会いをしていた。

「が、外国の方がいます。キレイな金髪です」

「さ、さすがに深夜アニメをずっと観すぎていました。早くいかないと麻冬さんにまた怒られてしまいます」

ただその出会いはなんとも残念な感じであった。

店長はやはり働かない

前回のあらすじ

秋月さんに誘われた仕事へ向かう途中少女にぶつかったら仕事先で運命の遭遇！しかも実は年上だった。果たして…

「とりあえず気は済んだかしら？」

あっはい

いきなり年上だと言われ少し取り乱してしまった　しかも聞くところによると成人しているという。

本当にいるんだなあ合法口「今考えてることやめないと…知らないわよ」にこっ　す、すいませんでした！

「まあいいわよく言われるもの　そういえばまだ名乗ってなかったわね　私は星川麻冬　これでもちゃんと成人してるれっきとした大人よ」

なんか会った時から大人びているとは思ってましたが…実際に大人でした。

「それで？」

いきなり星川さんがこちらを向いたがいったい

「私が名乗ったのだからあなたも名乗るのが普通じゃないのかしら？」

「あつすいません　そういうの慣れていなくて　比企谷八幡ですよ、よろしくお願いします」

「まだ働くと決まってるみたいだけどとりあえずよろしくね」

「は、はい」

なんかこの人に逆らえる気がしない（汗）

「それでんだけど…店長はまだ来てないみたいなのよ　だから休憩所で待っていてもいいかしら？」

「わ、わかりました」

そのままバックヤードの中を進んでいくと「更衣室」というプレートの隣の部屋に「休憩所」と書かれた場所を見つけた。

「ごごよ しばらくすると店長も来るだろうか…」

そう言いながら星川さんが休憩所の扉を開けたまま何故か立ち止まっていた。

今いる角度からは見えないので少しずれてみると…

「zzzz」

何故か床で金髪の外人さんが寝ていた。えっ！まさかこの近くに猫の絵の扉がっ！ なんてこともなくただ単に寝ていた。

「はあーっ」

何故か星川さんはため息をつくなり

「なんでここで寝てるのよー！」

そう言いながら金髪の男性を足蹴りにしていた。えっ！しばらくすると

「ああ…麻冬さんおはようございます」

男性はなに食わぬ顔で起き上がった。やたら日本語上手いなハーフとかか？

「おはようじゃないわよ もう仕事始まつてるわよ」

「ああそうでしたかすみません…深夜アニメをずっと見ていて寝ていなかったのです」

「はあーっ…またなのね」

深夜アニメ見てって完全にダメな大人だ…しかも星川さんのその後の言葉を聞くに常習犯のようだ。よく見ると秋月さんと同じ制服を着ていたのでこの店員みたいだが…よく首にならないものだ。

「ちゃんと仕事してくれないと困るのだけど「店長」」

…うん、この店の店長なんだから首にならないよなあ（汗）そんなことを考えていると

「とりあえず秋月くんからの紹介の子が来てるからちゃんと案内してね」

そう星川さんが言うところを店長さんが見たと思ったら

「ひっ…この方が腐っています。実はゾンビではないですよね？」
怯えられた。うん大丈夫慣れているから（泣）

「店長…さすがにそれは失礼よ」

星川さん：あなたは天使ですか？

「まあ確かに目は腐っているけれど…」

いえ：墮天使でした（泣）

――

――

――

「改めてまして私この店長をしています。ディーノと言います。よろしくお願ひしますね」

そう言いながら手を出してきた店長

「あの…ひ、比企谷八幡です…よろしくお願ひしましゆ」

か、噛んでしまった。仕方ないだろ　こういう面接みたいなのやったことないんだから　仕事へ戻ろうとしていた星川さんにも聞こえたように後ろで笑っているのが聞こえた　ひ、酷い（泣）

「ま、まあ落ち着いてください。誰にでも失敗はありますよ」

店長に慰められたが…正直ちよつと複雑な気分だ

「それで秋月くんの紹介ということでしたが…一応厨房には二人いるので大丈夫だと思うのですが…」

何も問題はないって本気で思っているようで店長は首をかしげていた。

いや：呼ばれた原因あなたが働かないからなんです…

「とりあえず今日一日働いてみてもらってそれから決めて貰うということ構いませんか？」

とりあえずお試しということか…

「まあ…それでしたら」

そう安請け合ひしてしまった。自分は後で後悔した。

働き始めて二時間後

店長全然厨房いないじゃねえかつ！

趣味仲間

「八幡！すまんがそのオムライス作ったら次のサンドイッチも頼む」

そう秋月さんは俺に言いながらフライパンでナポリタンを作っていた

「了解です…」

かくいう俺も今はフライパンの前でオムライスを作り終えサンドイッチを作り始めていた。

そして店長は

「いらっしやいませーステイレーへようこそ！ただいま席へご案内致します。」

何故かウェイトレスをしていたってあんたキッチン担当だるおうがっ！

いや…まあそんなことを思っただけはいたが…言わなかった。何故なら

「1000円お預かりします。お釣りが200円だよ♪また来てねお兄ちゃん♪」

「はいっ！これオムライス！早く食べて帰りなさいよね。べ、別に居ちゃいけないなんて言わないけどね」

星川さんともう一人の日向さんだったか？（仕事に入る前に軽く自己紹介をした。ちなみに俺はもちろん噛みました（泣）笑っていた星川さんと店長許すまじ！）も忙しそうにしていた。

なんのことはない人手が足りていないのだ。

現在お客さんがあまりいない状態でこれとか…秋月さんも俺にバイト頼むわけだ。そんなこと考えながらも作ったサンドイッチを皿に盛っていた。

――

――

――

そんな状態がしばらく続いたがお昼時をすぎるとお客さんもいなくなり遅めの昼休憩になった。

「いやあ八幡くんありがとうございます！何時もですと秋月くんだけの状態になってしまい、注文が溜まっていたのですが八幡くんのおかげで今日はお客さんにお出しするのが遅れませんでした。」

何故か名前で呼ばれながらレジ計算をしていた店長さんに感謝をされていた。なら店長がキッチンに入れよ！と思っっている俺がいる。一番その苦勞をかけられれている秋月さんは賄いというお昼を作ってくれていた。(俺も手伝おうとしたのだが「一人で大丈夫だ」の一言で済まされてしまった)

「キッチンが忙しいのは誰かさんがギリギリまで寝ていて仕込みが充分に出来ていなかったりするからだと思うのだけれど…」

そう言いながら補充作業をしつつ星川さんが店長を足蹴りにしていた。

「麻冬さん痛いですっ…仕方ないのです。今期のアニメもいろいろあるので寝る時間などないのです」

うん：秋月さんが呆れるわけだ。この人いろいろダメだ

「まあ…日曜日は基本的に出かける用があるわけではないので、朝でなければ一応時間はあります」

ただし来るとは言っていないがな(笑)あと日朝キッズアニメは見逃せない！(いつも妹の小町には冷めた目で見られている)

「どこかへ友達と出かけないの?」

モツプをかけていた日向さん

「自分学校でぼっちなので友達とかいません」

そう言ううちょうど賄いを運んできた秋月さん以外全員から哀れみの目を向けられた。べ、別に寂しいわけじゃないからな(泣)

しばらくして補充作業終わらせた星川さんに店内をモツプがけしていた日向さん。そして賄いを運び終わった秋月さんもテーブルへ集まってきていた。

「ところで八幡くんは趣味などありますか?」

っと賄いのパスタを食べながら店長さんが聞いてきた。

「趣味…ですか 人間観察とアニメ観賞にゲームくらいですかね」

そう言うのと食べていた三人は手の動きを止めこちらを見てきた。
な、なんか怖い！（秋月さんは我関せずで賄いを食べていた。

「…も、もしかしてなのですが日曜日の朝は無理というのは…」

「まあ…アニメを見るからですけど…」

そう言うなり星川さんと店長は目を輝かせていた。

「ち、ちなみに深夜アニメ派ですか？それともキッズアニメ派ですか？」ゴゴゴ

な、なんか店長の威圧感が…

「えーつと深夜アニメ…も見ないことはないですけど基本的にはキッズアニメをみてましゅ」

何故か最後に噛んでしまった。 恥ずか死ぬ！

「そう…ですか」しよぼーん

答えを聞くなり店長は少ししよんぼりしていた。 はあーつ…気づかれて「それで？」いきなりセリフ取らないで欲しいです。

「それで…好きなアニメは？」

そう聞いてきたのは予想外に星川さんだったえっアニメ好きなのか？

「す、好きなアニメですか？えーつと…仮面○○○とかスーパー○○○シリーズも見ますがプリ○○○シリーズとかあと魔法少女フリルちゃんってアニメなどはよく見ます」

何故か誤魔化せない空気を感じたので素直に言ったのだがさすがに引かれないだろうか？

そんなことを考え恐る恐る前を向くと…

「あなたも仲間だったのね同士に会えて嬉しいわ」キラキラツ

凄くいい笑顔の星川さんがいました。 凄く可愛いと思ってしまつたと言えるわけなかった。

その後は麻冬さん（星川さん呼びをしたら名前呼びでいいと言われ、なんか、断りずらく呼ぶことになってしまった）とのフリルちゃ

んトークをしていたがめちやくちや詳しくてさすがに驚いた。そして店長は何故か秋月さんに絡んでいた（凄く迷惑そうだ）

そんな昼休憩も終わり 昼過ぎからの準備のため秋月さんと仕込み用の段ボールを運んでいると

何故か店の前でにらめっこしている女子高生がいた。

「あれ何？」

「さあ？」

日向さんと秋月さんもそれを見て疑問だったみたいだ。

「萌えです」

そして後ろで見ていた店長は何か一言言うとその女子高生に近づいていた。

「店長何やってんだ？」

それは見ていた全員感じていた。そして店から人が出てきたことにびっくりした女子高生は店長をみると…

何故か店長は鼻血を出して倒れ女子高生は顔を青くして叫んでいるようだった。

あの人ホント何してんだ？（呆）

新たに加わる仲間

前回：昼からの開店準備をしているとにらめっこしていた女子高生に店長が近づき鼻血を出して倒れた。 以上

まあ：店長だしなあーと失礼なことを考えながらも路上に置いておくのもまずいと思い（むしろ麻冬さんは放置しようとしてたが秋月さんの説得？によりしぶしぶ了解）俺と秋月さんで店長を店の中へ運んだ。あたふたしたままの女子高生も放置するわけにもいかず日向さんをお願いして店へと一緒に来てもらった。

しばらくすると店長が起きた

「いやあすいませんー！私興奮し過ぎると鼻血を出すくせがありました…」

「えーっただけこの女子高生に興奮してんだ…」

「えーっ…あ、あの…いきなりだったのでびっくりしただけなのでこちらこそお見苦しいものをお見せしました」

なぜか女子高生は顔を赤くしたかと思うと何故かいきなりぷるぷると震え始めた。何かと思ったら

「ひっ…」

俺の目を見て怖がっていた（泣）そしていつの間にか後ろで笑ってる三人絶対許さん！後でブラックリストに入れておこう

「私ディーノ言います。イタリア出身でキッチン担当ついでにこの店長もしてまあす」

笑われたことを気にしていたら店長が自己紹介をしていた：何故か店長の肩書きがついで見たいに

「ところであなたうちの前でなんでにらめっこなんてしてたのかしら？」

さすがはこの店で一番の常識人の麻冬さんである。俺じゃあ聞けないことを平然と聞くそこに痺れる懂れるう（日向さんも常識人かと思っただがゲームの話させるとヤバいことが休憩中にわかった…：そしていつの間にか名前呼び…）

「えーっ…実は今日お仕事の面接へ行ったのですが…落ちてしまいま

してこの目付きの悪さが原因かと思って思ってたレ目にならないかな？って思ってた見たら」

そこでいきなり店長に声をかけられたわけな…後ろで店長が「その目がいいんです。ゾクゾクしまあす」と言っていたが…ただの変態じゃねえか！

「えーつと…そ、それであなただはこの娘さん…ですか？」

麻冬さんを見るとそう言う女子高生…いやまあ確かにどう見ても大学生には見えないよなあ よくよく考えれば今のだと麻冬さんが店長のむす「比企谷くん…余計なこと考えないほうが身のためよ」…イ、イエスマム…(汗)

「…よく間違えられるのだけれどこれでも成人しているうえ貴女よりも年上よ それよりも自己紹介ね…私は星川麻冬ホール担当よろしく」

その自己紹介を聞いた女子高生はまた慌てながら

「すすす。すいません！年上の方とは知らず失礼しました。えーつと…わ、私は桜ノ宮苺香と言います。よ、よろしくお願いします」

「そんなに謝らなくてもいいわよよくあることだから…」

さ、さすがは大人の余裕…俺ならこの目を悪く言われたらしばらく立ち直れない

「それじゃあついでに私も自己紹介するね！私は日向夏帆私もホール担当ね。よろしくね苺香ちゃん」

麻冬さんの横から顔を出して日向さんも自己紹介をしていたが…ある一部がすごく…その 揺れてました。

「んじやあ次は俺か俺はキッチン担当の秋月紅葉よろしくな桜ノ宮」

えっ！これ次俺も自己紹介しないといけないの？

「えーつと…俺は比企谷八幡って言います…今日から入ったキッチン担当だ。よ、よろしく」

嘩まずに自己紹介出来て正直ホツとした。

「み、皆さんよろしくお願いします」

そう言うのと丁寧にお辞儀する姿から何処かのお嬢様のような雰囲気があるなと思っっていると

「それで苺香さん！第一印象から決めていました…好きです！お付き合いを前提にうちで働きませんか？」

「いや…そうじゃないでしょ！」

「あの…私をこちらで働かせていただけるんですか？」

「そこおっ?!」

「はいっぜひ！あなたのような方をお待ちしていました」

「そ、そう言ってもらえてうれしいです。あつても接客ですよね 私目付き悪いんですけど…大丈夫でしょうか？」

「何を言いますか！その目がいいんです。ぞくぞくしてきます」
さつき後ろで言ってたことを堂々と本人に言うとか…

「あのこんな私で良ければよろしくお願いします」にこつ

その笑顔を見た店長がまた鼻血を吹いて倒れたがさすがに麻冬さんと秋月さんが呆れ果てていた。

しばらくすると店長が起きあがり

「それでなんですが苺香さんにはドSキャラをやっていただけだきたいのです」

「わ、わかり…ド、ドS?!」

いきなりのことにさすがに桜ノ宮さんも戸惑っているようだった。

「実はここはいろんな属性のキャラを成りきって接客する喫茶店なのよ メイド喫茶とか執事喫茶に似た感じね」

「な、なるほど…」

「ちなみに私はツンデレ担当ね…べ、別に来て欲しいなんて思っていないだからね」

「それで私が妹キャラなのだけれど…どういのかは仕事の時に見せてあげるわ」

そういえば麻冬さんは仕事のスイッチ入らないとキャラに成りきれないんだつたな…まあスイッチ入ると凄いんだが…

「そ、それでドSキャラと言われましたもどどのようにやれば…」

「そうですね。お客さんを汚物を見るように見下すような感じでお願います」

「お、お客様ですよねっ?!」

「大丈夫デース！それが大好物の人もいまーす…それと八幡くんにも女性のお客さんを担当していただきたいのですが…」

えっ！俺キッチン担当じゃないのん！

「八幡くんにはひねデレ担当でお願いしまーす」

「はっ？ひねデレって…どうやれば…」

「簡単デース普段している感じで接客して貰えば大丈夫デース」

なんかいきなりホールもやらされるうえにひねデレって…いや確かにひねくれているがデレてはいないぞ（汗）

新たな才能と変態とぼっち

店長が新しく雇った少女 桜ノ宮苺香さんは何故か店長にドSの才能を見出だされていた。巻き添えに俺もまさかのホールへって…お客さん減らないかな？

桜ノ宮さんのドSキャラ担当が決まったところで今日から働くのが決まり用意してあったらしい制服を着に女性陣は更衣室へ向かった。男性陣は…

「だからキツチン担当いねえから八幡呼んだのに何勝手にホール担当にも決めてんだ！」蹴り

「おっふー秋月くんい、痛いです。八幡くんをホール担当にもしたのにはちやんと理由があるのです。せ、せめて理由を聞いてから判断お願いします」

秋月さんにけつを蹴られながら店長は俺をホール担当にもした理由を教えてくださいよう。これは俺も気になります！

「理由か…いいだろう…ただし！その理由次第では店長の持つてるフィギュアを壊すからな」

「わ、わかりました…（後でフィギュア隠しておきましょう（汗）」

「それで理由は俺も教えてもらえるんですよね？」

「は、はい…あのですね 私常日頃思っていたことがあるのです それ…」

「それは？」

「このお店に女性客が全然来てくれないのでーす!!」デース…デース 何故か店長の声にエコーかかっている気がした。

「そりゃ…確かにそうだ！俺もそれが不満だったんだ!!」

店長の意見に秋月さんまでもが叫んでいた。そりゃそうだろうよ「…いや、だってここ男の人が喜びそうなキャラ属性になりきる喫茶店ですよ？女性客はあまり来たがらないんじゃないかと…」

俺がそう言うよ

「私もそう思っていました。なので最近私もホールへ出て女性客でも入りやすい空間にしたのです」

「えっ…何故そうなりますか？」

「だって私イタリア人ですよ？イタリア人といえば女性の扱いに上手いと相場が決まっているじゃあないですか！」

いや…そんな力説されても(汗)イタリア人のイメージってナンパ大好きな頭の中お花畑みたいなのがたくさんいるって印象しか(ちなみにこれは作者談)

「そう思ったのでキッチンよりもホールへ出ることにしていたのですよですが…」キッチンの仕事全部俺に任せてそんなことのためにホールにいやがったのか！」げしつ　あ、秋月くん　しゃべっている途中の蹴りはご勘弁を…」

「そ、それで気づいたのです。この店には女性ウエイトレスはたくさんいますが男性はいないことにつ！そこで考えていると秋月くんが八幡くんが来るといいうじゃないですか！そして閃いたので！そうだその人にもキャラ属性に成りきってもらおうと!!」ばーんっ

何故か後ろで音が鳴ってるような気がしたが気のせいだよな？

「…女性客を増やすためなら…わかった！ただし平日だけだ！休日は人手足りなくなるから八幡がいないと困る」

本人の了承なしに勝手に決まってしまった(泣)

「その代わり店長にはホール気に来れないくらいキッチンの仕事してもらうからな」

店長が嫌そうな顔をしたら秋月さんにまた蹴られていた。

――

――

――

そんなことをしている間に俺も男用のホール制服に着替えホールに戻る

「お、お待たせしました／＼／＼」

そう言いながら桜ノ宮さんがピンク色のフリフリ制服を着てやってきた。

「素敵ですー！」

「うんうん／＼／＼」

「きゃー苺香ちゃん可愛いー！似合う似合う」

「確かに可愛いわね…よく似合っているわ」

「…／／／」プイッ

三者三様の反応をしていた。最後の人なんてそっぽ向いてるぞ…
はい自分です（汗）

「きよ、今日からよろしくお願いします」

そう言うとき桜ノ宮さんはお辞儀をした。な、なんて律儀なっ

「んふふっ♪やっぱり何度見ても苺香さん可愛いですねー」

そう言うなり店長は桜ノ宮さんの回りをぐるぐる回るなり携帯を
取りだして

「ほらッ苺香さんピースピース♪」

そう言い隣で一緒に写ろうとピースをしていたが

「ピ、ピー」んなことやってないで働け！」ス…へっ？」

横から秋月さんにドロップキックされていた。まあこれは店長が
悪い

その後店長はすぐに起き上がり

「では苺香さん八幡くん今日からよろしく願いしまあす 今日
はまだ開店してすぐなので八幡くんにも慣れてもらうためホールに出
てもらいますね」

「まあ…いきなり平日やってもらうよりかはいいか…ただそのぶん店
長はキツチンだからな」

「わ、わかりました（汗）」

そんな話をしていると

「あの…先ほど説明されたようにお客様を見下すのなんて正直私に出
来るでしょうか？」

桜ノ宮さんが着替え行く前に言われたお客さんを汚物を見るよう
な目で見下す つとさつき店長に説明されたことを気にしていた。

「大丈夫デース…お客さんを汚物を見るような目で見下しただ思いつ
きり罵りまくってもらうだけなので問題ないですーす」

「そ、そう言われましても…お客様なんですよね？」

「大丈夫よそういうのを喜ぶ店長みたいな人もいるんだから」

言葉の裏に何故か「変態」と書かれている気がした。

「とりあえず論より証拠：ほらっ！お客さんも来たみたいだから行ってみなさい」

そう麻冬さんに言われるほうを見ると二人組の男性が店に来ていた。

「さあ、初仕事ですよ苺香さん」

そう言われながら電車に背中を押されお客さんの前に立った桜ノ宮さんなんだが大丈夫か？

「あ、あの：二名なんですけど」

お客さんがそう言うのと

「な、なんで来たんですか？」ひくっ

「あつ：ごめんなさい」／／／

お客さんを罵っていた。しかもお客さんは興奮してらっしゃる（汗）

その後もお客さんの注文したオムライスにケチャップをかけようとして勢いよく握りお客さんの顔にケチャップをかけるなりジト目で

「き、汚い」

そう言っていた。キッチンの前で「フオー行っただほうがいいかな？」と日向さんは心配していたが秋月さんが大丈夫だと言っていた。正直俺も思っていた。何故なら…

「あ、ありがとうございます」／／／

とお客さんには受けているのがわかったから。天職なんじゃないか？

そしてそのお客さんがオムライスを食べ終え（オムライスにはブタとエサと書かれていたがキレイに食べられていた）お会計を済ませ帰る際も

「行ってらっしゃいませ。二度とお帰りにならないでください」

と、笑顔で見送っていた。

そしてお客さんがドアを閉めるなりぷるぷると震え始め

「ごめんなさいごめんなさい！いっぱい酷いことしてしまいごめんなさい！また来てくださいお待ちしています。あのあの…あれで良かったんでしょうか？お客さまを怒らせてしまったのではないのでしょうか？」あわあわっ

そう言いながら桜ノ宮さんはおろおろしながらもこっちにやってくる。それに秋月さんと日向さんに麻冬さんは

「上出来よ！いいDSっぷりだったわ」

「ゴミを見るようなあの目最高だったぜ」

「この仕事があなたの天職だと思っただわ。いいDSっぷりだったわ」

三人とも大賛辞であった。

「自信を持ちなさい。その証拠に」

そう言い麻冬さんが後ろを指指すと

「て、店長さんっ！」

店長が血を流しながら床に血で何かを書いた状態で倒れていたもはや事件現場状態にさすがに俺は絶句していた。ここ大丈夫か？

ぼっちの初仕事とドSの夢

桜ノ宮さんのドSっぷりを大絶賛した。一同は次に俺の初仕事をさせるため女性客が来るのを待っていたが

「いらっしやいませ。べ、別にあんたのこと待ってたわけじゃないけどそこにいると他の人に迷惑だから座りなさいよ」ぷいっ

「はいーお兄ちゃん♪オムライスだよ。いっぱい食べてね」にこっ

「なんで来るんですか？来て来れなんて行ってないですよ？水もつたないから持ってこなくていいですよ？早くメニュー決めてくれないですかどんくさい」ひきっ

三人のウエイトレス目当てに男性客は来るがやはりこういう店には女性客は来づらいようだ。

「はあーっ…待てども待てども女のお客さん来ませんねー」

「そうですねー残念ですねー」棒読み

「八幡…せめて棒読みは止めるよ(呆)残念だとこれっぽっちも思っていないだろ」

そりや急遽ホールに決まったのだやりたくないに決まってる。

そして閉店時間も近くなり接客やらなくても良かったと思いきや安堵をしていると

「すいませんー！二名なんですけど…」

素晴らしいお客さんがやってきたしかも女の…ちつくしよー神さま恨むぞ。

「ほらっ女のお客さん来ましたよ。さあ八幡くん初デビューですねー」

素晴らしいながら俺の背中を押す店長…あんた絶対楽しんでるだろ…仕方なく女性客の案内をしに俺が向かうことになった。不本意ながら

「いらっっちゃ…いらっしやい…ませ／＼／」

開始早々つまづくとか(泣)

「二名ですけど…席空いていますか？」くすくすっ

「に、二名さまですね…こ、こちらです／＼／」

案内し終わりお冷やを取りに行く時に「頑張つてね」と励まされた。このままもう帰りたい

「八幡くんに求めたのはドジっ子キャラではないのですが…お客さんも喜んでくれるようなので及第点ですねー」

店長には本気でキャラだと思われ

「比企谷くんがまさかね…」ふふっ

麻冬さんには予想外だったのかちよつと驚きながら軽く笑われ

「ぷっ！くくくっ／／」ばんばんっ

秋月さんと日向さんにはがつつり笑われ（この二人は絶対に許さないノートに書いてやる）

「あの…その比企谷さん…が、頑張ってください!!」

桜ノ宮さんには応援された。桜ノ宮さんそれが一番堪えるんです（泣）

そしてお冷やを渡しに行く際にもまた嘔み「大丈夫だよ」と笑いながらも励まされた。もう嫌だ…

ついに投げやりになつた俺はいつものように

「このメニューおすすめですけど別に食べたくないなら構わないんですけどまあ…おすすめってだけだから美味しくもないものおすすめないだけです…どうします?」

つとかなり口調が砕けた感じでしゃべってしまいまじかつと内心冷や冷やしてたが

「じゃあそのおすすめを2つお願いしてもいいですか?」

そう言われちよつと嬉しくなり

「あ、ありがとうございます／／」照れ

と言い逃げるように秋月さんに注文を言いに行く

「八幡くんやれば出来るじゃないですかあ！それを待っていましたよ」

と店長に賛辞を送られ

「あれがひねデレなのね…歳上の女性にはいいんじゃないかしら…」

と麻冬さんに評価してもらい

「いつもの八幡だが、受けてみたいだしいいんじゃないか?」

と秋月さんは注文の料理を作りながらも評価してくれ

「私的にも有りなジャンルかも」／／／

と日向さんが評価してる裏で「あれがひねデレ…勉強になります」と桜ノ宮さんは若干興奮していらした。布団にうずくまりたい…

「もう無理！」と完全拒絶を俺がしたので代わりに店長が注文の品を持っていくと…戻ってきた店長が泣きなが

ら「さっきの店員さんに運んできてもらいたかったね」という言葉を聞きガチへこみをしていた。(桜ノ宮さんに慰められすぐに回復していたが…)

その女性客二人が帰り際にこちらに手を振ってくれたが恥ずかしくてそっぽを向いてしまったが…また来てくれるだろうか？

そのまま閉店の時間になったので閉店後の作業をしていると

「あの…店長って外国の方なんですよね？」

「ええイタリア出身です」

正直こんなイタリア人なかなかいないと思われる。

「あの！実は…私外国に憧れていて…いつか留学したいと思って…」

「それで仕事探してたんだ。苺香ちゃん頑張りやさんだ」

「夏帆さん！そ、そのありがとうございます。実は費用を貯めて海外留学したいと思うほどです」

海外留学のために働くって…かなり大変なんだろうな…応援はまあしてあげよう

「まあ…その頑張りよ！いつか留学出来るといいな／／」ぷいっ

「はい…そのありがとうございます」にこっ

不覚にもその笑顔にときめきそうだった。俺はいつの間にか毒されてないか？(汗)

「外国お好きなんですかね」

そう店長がいうと

「はい！大好きです」にこっ

満面の笑顔で店長に返す桜ノ宮さん…あっこれは

「店長…今の店長に言ったんじゃないからね」

そう日向さんに言われても店長が興奮してるのを全員(桜ノ宮さん

以外)理解していた。

俺がときめくわけがない

初めてのバイトを終えた翌日 学校が終わりそのままステイールまで向かった ん？奉仕部？ナニソレ？ハチマンワカンナイ
すぐに店に着いたので店へと入ると

「おはよーございま 「八幡くん助けてください！」 つす…」

店長の背中に麻冬さんが乗っていた。またなにかしたのか？

「比企谷くんに助け求めない 自業自得でしょ？ 仕事中に寝るのが悪い」ビシッ！

素晴らしいながら店長にチョップをしている麻冬さん…なんか若干楽しそう？

「だって深夜アニメ見てて眠いんです」

「だったら録画すればいいじゃない」

「リアルタイムで見るのに意義があるんです」

店長の言いたいことも分かんなくないが…仕事中に寝ちゃダメだろ(汗)

すると

「おはよーございます」

そう言つて桜ノ宮さんが入ってくる

「苺香さーんっ！」 と言いながら店長が無理やり立つたため上に座つてた麻冬さんがっ！

「あぶなっ！ま、麻冬さん…大丈夫 ですか？」

近くに居た俺がどうか怪我しないように受け止めることが出来た。とりあえず無事でよか「比企谷くん？」 そう呼ばれたので麻冬さんを見ると少し顔を赤くしながら

「た、助けてくれてありがとう／＼／ただ…その 離れてもらつてもいいかしら？」／／／

そう言われ今の状況を見ると…

目の腐ったやつが少女を抱き締めている状態だった。 あっやば！

気づくなりすぐに離れ土下座しながら

「も、申し訳ありませんでした」

少女に謝る腐った目のやつがいた。っていうか俺だった。

「比企谷くんは助けてくれただけだから気にしなくていいわ…悪いのは」

そう言い店長をみる麻冬さん

「ひいつ！麻冬さんご勘弁を！」

そう言いながら桜ノ宮さんの後ろに店長は隠れていた。女子高生の後ろに隠れるって男としてどうなんだ？

「なんか…麻冬さんが店長の上司みたいですね！」

桜ノ宮さんが純粹な目でそう言っていたが正直店にいる全員そう思っていました（汗）。

麻冬さんのおしおきが終わり店の準備していたのだが…

「麻冬さん？」

「比企谷くん何かしら？」

「右足見せてください」

「…比企谷くんまでそんな趣味があるなんて正直ショックよ」しくしく

そう麻冬さんは嘘泣きをしていたが…

「足…痛みますよね？」

俺がそう言うのと麻冬さんはこちらをジーつと見てきた。

「…なんでそう思ったのかしら？」

「俺はぼつちだから人の視線や仕草には敏感なんです。

麻冬さんを そのだ、抱きしめたとき以降から足を無理に動かしている気がしたので それで店長から落ちた時にでもひねったのかなって」

「そう…比企谷くんには気づかれてたのね…それで？それを私に言うてどうするのかしら？」

「何も…麻冬さんが大丈夫というなら俺は何もしません

ただ無理だけはしないでください」

「あら？心配してくれるの？」

「麻冬さんが無理して動けなくなっって自分の仕事が増えるのが嫌なだけですよ つまりは自分のためなんですよ」

俺は人のためには行動しない 全部自分のためだ。

「確かに足が少し痛むけれど仕事に支障はないわ。さあそろそろ開店するわよ。準備終わらせなきゃ…」

そう言うなり麻冬さんは開店用の補充に戻っていった

――

――

――

開店してすぐはお客さんもいなかったがしばらくすると数人のお客さんがやってきた

「お帰りお兄ちゃん♪すぐに席に案内するからね」

麻冬さんのほうを見るがいつも通りに接客していたので少し安心した。

お客さんも減り店が落ち着くなり店長は桜ノ宮さんに絡んでいた。店長としてそれはどうなんだ？

「苺香さんの制服姿いつ見ても可愛いですねー」

「あの…ありがとうございます／＼／＼」

「可愛いでーす！…麻冬さん麻冬さんこの子お持ち帰りしてもいいですか？」

「いいわけないでしょ」げしっ

「麻冬さん痛いです！暴力反対でーす」

そんなことをしてる間にお客さんが来たので麻冬さんが向かったのだが…

「っ…お、お帰りなさいお兄ちゃん♪」

一瞬だったが麻冬さんの顔が歪んだ気がした。だがすぐに何事もないように接客をしていたので俺はキッチンに戻ることにした。

最後のお客さんが帰り閉店し休憩所で皆と話している麻冬さんを見つけた。

「麻冬さんにお願いがああるんですけどいいですか？」

「あら？私に何か用？」

「大したことじゃないんですけどこの近くにあるアニメショップ連れ

て行ってくれませんか？魔法少女フリルちゃんのDVD買ってないの思い出したので」

「でしたら 私が案内します！」

店長がワクワクしながら話に入ってきた。

「苺香さんたちも行きませんか？」

そう店長は勧めたが…

「すみません。実は夏帆さんとゲームセンターに行く約束していたので…」

「そう…ですか」ずんっ

店長は見るからに落ち込んでいた。だったら

「だったら店長は桜ノ宮さんたちに着いて行っては？」

俺がそう言うのと店長は多少渋っていたが「女の人だけじゃあ危ないんじゃないですか？」と言った瞬間

「わ、わかりました!!私に任せてくださいーい」

と自信満々に答えていた。

「じゃあ比企谷くん行きましようか？」

麻冬さんにそう言われ先に店を出た

しばらく歩くと

「じゃあ麻冬さん…病院に行きましようか？」

そう俺は麻冬さんに言った

「…比企谷くんいきなりね…大丈夫って言ったはず「足…もう歩くのも辛いんじゃないんですか？」っ！」

俺がそう言うなり麻冬さんは苦い顔をした

「…なんでわかったの？」

「最後のお客さん来るちよつと前に麻冬さん顔を少し歪めていましたよね？あれでわかりました。たぶん我慢できないほど痛んできたのかもって」

「よく…見ているのね そうね今も痛みで歩くだけで辛いわ…」

そう麻冬さんが言った際額の脂汗に気づいた この人ただけ我慢強いんだ？

「比企谷くんにお願いがあるのだけどいいかしら？」

「何ですか？」

「背中…貸してもらってもいいかしら？正直病院まで持ちそうもないの」

そう麻冬さんは言いながら立つのも辛いようで近くの壁に身体を預けていた。

「病院までなら…それ以上はさすがに恥ずかしいので／＼」

そう言い俺は麻冬さんに背中を向けて座った。

「悪いわね」そう言っただけ麻冬さんは俺の背中に乗るが…あまりに軽くてちよつとびっくりしてしまった。

しばらくその状態で歩くと

「最後まで仕事させてくれてありがとう」

麻冬さんにそう言われた。

「別に…ただ自分がホールに出たくなかっただけですから」

「店長たちに心配させたくなかっただけの癖に」

ぼそつと麻冬さんは言っているのを俺は聞こえないふりをした。

「比企谷くん…何かお礼させて欲しいのだけど何がいいかしら？」

そう麻冬さんに言われたので

「じゃあ今度本当にアニメショップに案内してください」

そういうと

「わかったわ約束よ「八幡くん」

…正直耳が赤くなったのを麻冬さんにバレていないか心配していた。

—————

おまけ

麻冬さんを病院までおぶっていたのだが…

「君 ちよつといいかな？」

警察の人に何回も職務質問された。なんか最後に散々だ（泣）

会議とスイーツ

麻冬さんと出かける約束をした週の土曜日俺は休憩所の前で足を止めてしまった

愚民愚民愚民ゴミクスゴミクスゴミクスゴミクスゴミクス豚野郎豚野郎豚野郎

なんだろ…軽い呪詛が聞こえる

「おおー！八幡おはよーさん」

「あつ！比企谷くんおはよー！」

「八幡くんおはよー」

休憩所の前で立ち止まっていると出社してきた三人が来た。何故だろう出社と聞くとじんましんが…

「お、おはようございます」

少し噛んだがちゃんと挨拶出来た俺を褒めてやりたい！

「んでそんなとこ立ってどうしたんだ？」

「いや…なんか休憩所から呪詛みたいのが聞こえるので…」

「呪詛？そんな聞こえるわけ…」

ゴミ野郎ゴミ野郎ゴミ野郎へタレへタレへタレへタレへタレ帰れカス帰れカス帰れカス

「「これなんて呪文？」」

三人して頭に？マークが付いているのが見えた。

そして日向さんが休憩所の扉を開けると

「なんだ苺香ちゃんだったのね…」

制服に着替え準備を済ませた桜ノ宮さんがいた。

「あつ…すいません実はドSの練習をしています」

ドSの練習っていうよりただの早口言葉（罵倒ver.）って感じだった気がするがあえて言わない。絶対めんどくさくなるので

「それじゃあそれもドSの練習？」

と日向さんが指を指したところをみると

「て、店長さん!？」

店長をお尻に引いていた。これ店長的にはご褒美では？

「お、おはよーございます…」

「って今起きたの！」

「また深夜アニメ見てたんだろ」

もはやいつものことだが店長は休憩所でしょっちゅう寝ている。しかも主な理由が深夜アニメを見ていて全然寝ていないから…

そんなこととは露知らず下敷きにしたことを桜ノ宮さんは必死に謝っていた（店長理解していないが…）

「まったく早く起きなさい」そう言った麻冬さんに耳を引っ張られやつと店長は起きた

起き上がった店長に桜ノ宮さんは

「そのまま起きなければ良かったのに」ジトツ

これを地でやっているのだから練習は要らなくないか？（店長以外全員拍手していた）

そして開店して入り口で転びそうになったお客さんに

「はっ大丈夫ですか？」（笑）

注文を再度聞きにいった時には

「すみません…注文もう一度いいですか？」へっ

お客さんの注文とった時には

「ピクルス抜きですか？」ふっ

そして何回も来ているお客さんには

「あっ昨日もいらっしやいましたよね？」ぷっ

なんだろう今日の桜ノ宮さんDS力が高い…

「ほらっ八幡くんも母香を見てないで女の人来たわよ…接客」

そう言われ入り口をみると三人組の女性客が

「はあっ…行つてきます」正直ため息しか出ないほど衰退している自分分がいた。

「来てくれとは頼んでいないですが…来てくれたことには感謝します。い、いらっしやいませ／＼」ぷいっ

何故かいつもこの後お客さんは黙ってしまうのだが…何故だ？

「メニュー見てもいいですが呼ばないでくださいね まあ来ないとは言わないですけど…」

そう言っ歩いて戻ると麻冬さんがこちらを見ていた

「麻冬さんどうしましたか？」

「八幡くんあなた学校でモテない？」

そんな疑問を投げ掛けられたのは初めてだ

「俺ですよ？モテると思いますか？」

いつも教室では机に伏せて寝たフリしたり、班行動とか絶対したくないようなぼっちですよ？モテるわけがない

「まあ八幡くんがそう思ってるのならいいのだけどね」

そう言おうと麻冬さんは接客に戻っていった。

――

――

――

その後特にトラブルもなく（桜ノ宮さん目当ての常連客は増えたが）午前中の仕事を終えお昼ご飯を食べ終わると店長が

「それでは今から今月のミーティング始めます」

そう話始めた初めてやるが大丈夫なのか？

「苺香と八幡くんは初めてよね　まず全員でこのお店に足りないものを上げてからどのよう改善していくか話し合うっていう感じよ」

そう麻冬さんが教えてくれた。

足りないもの…か

「強いていうなら店長の働きですかね」

「えっ！」

「あー…まあ仕事中に寝てたりよく仕事前に休憩所で寝てたりするからな」

「前に苺香ちゃんとしゃべっててお客さんが来てるの気づいてないときあったし」

「あと毎度鼻血を出されると掃除するのが大変なのよね…」

「二つで改善方法は？」

「あの一…えーっ」とあたふたっ

「…はい！今後は気をつけますのでお許しください」（泣）

まあ…いじめたいわけではないのでこれくらいにするか

「俺から上げるなら女性が足りないってくらいだな…」

秋月さんがそう言っていたが

「女性ならスタッフに充分いるじゃないですか？」

俺がそう言うのと店長が起き上がり（目が光ってる）

「いえ二人ほど足りませんよ。お姉さんキャラとかボーイッシュな僕っ娘キャラとか」

そう店長が言うのと「スタッフじゃなくて客だ！」と秋月さんが否定
っていか店長やたら具体的なキャラを…何かあるのか？

「そういえばここの女性のお客様少ないですよね」

「まあ…こういうお店だしね。これでも比企谷くんのおかげで女のお客さんも増えたほうなのよ」

そう日向さんは言うがそのぶん俺の精神が（泣）

「秋月さんはどうして女性のお客さまがいいんですか？」

「なんかイヤらしい…」ぷぷっ

そう日向さんが言うのと

「俺が求めているのはそんな不純な理由じゃねえ…俺が求めているのはな
「百合」なんだ！」

まさかの秋月さんの告白に桜ノ宮さん以外どん引き

「秋月くん…女性にそんな理想押し付けられないほうがいいわよ」

麻冬さんのその発言により秋月さんは机に倒れた。まあ…そんな

理想押し付けたくもなりませんよね（汗）

「他に何か足りないものありますか？」

「足りないもの…っというか甘味が少ないです」

そう言うのと女性陣から賛同の声が上がった

「そういえばそうね…少ないってわけではないけどあまりないわね」

「私も甘いもの好きなのでその意見には賛成です」

「っで足りないって気づいてるってことは何か意見あるのかしら？」

「意見ってわけじゃないですけど…この店にしかないデザートってないですよねっ…」

有名なお店ではお店オリジナルの看板メニューってあるからな…
…メニューみただけでそういうのなさそうだったしな

「そうですねー…なかなか新メニューの開発でそういったデザート出来たことないですね」

店長がそう言うとうと

「じゃあ明日の新メニュー開発会議でオリジナルメニュー考えてみるのはどうかな？」

「そういえ日曜にあったわね…血がたぎるわ」

と麻冬さんが珍しく燃えていた。

「ああ…これは負けられないな」

と秋月さんにも火が付いていた。

新メニュー開発だけでそんなに燃えるものか？

「実はねこの会議毎シーズンチーム戦でやるんだけど新メニューに決まったチームには店長から賞品が出るのよー！」

そう言った日向さんも燃えていた。これどうなるんだ？

—————

おまけ

「そういえば麻冬さんいつの間にか比企谷くんのこと「八幡くん」って呼んでるけどいつから何ですか？」

「ふふっ…それは内緒よ☆」

「私にはこの前前で呼んでみて頼んだら…土下座して「勘弁してください」って言われたわ（汗）何が違うんだろ？」

「私も比企谷さんに名前前で呼んでくださいと頼んだのですが「ごめんなさい無理です」と言われキッチンへ戻ってしまいました。麻冬さん何かしたんですか？」

「まあ…いろいろね♪とにかく私が八幡くんと女性スタッフの中では一番仲良いってことね」ふふっ

（なんか麻冬さん嬉しそう）

スイーツ対抗戦

日向さんから新メニュー開発のことを聞いていると店長が「それはチーム分けを決めますので好きな棒選んでください」と言い6本の棒を持っていた。これなんて王さまゲームと思っていると全員取り始めたので俺も1本取ると数字の「1」が書かれていた。

「では同じ数字の人同士でペアを組んでください」そう言った店長の手にある棒には「3」と書かれていた。

しばらく探していると「あら？」という声が聞こえたので振り向くと

「八幡くんとみたいね。よろしくね」と「1」と書かれた棒を見せながら麻冬さんが見えていた。

「よろしくお願ひします」そう言うなり他もペアが決まっていたようで二人ずつになっていた

「よろしくお願ひしますね」「こちらこそお願ひします」店長・桜ノ宮さんペア

「秋月くんとか…」「何だよ…不満か？」秋月さん・日向さんペア
そして俺と麻冬さんペアか…まあ見事に男女で分かれたな。

そして日曜日

店を定休日にしてチームごとに新メニューについて話し合いをすることになった。休憩所を俺と麻冬さんが使わせてもらうことになったのだが…

「やっぱり女性向けで考えるならスイーツがいいわよね？」と麻冬さんが言い「いいんじゃないですか」そう返す俺

「ここはフルーツたくさんのパフェよね？」と麻冬さんが言えば「いいんじゃないですか」と返す俺

「…ただフルーツだけではインパクトにかけるからソースにも工夫加えたほうがいいわよね？」と麻冬さん「いいんじゃないですか」と俺
ずつとこんな感じである。

「……八幡くん」

「はっ？」

「相づちじゃなく案を出して欲しいのだけど？」

「いや：俺にそう言われましても：」頭かきかき

実際初めてのことだから慣れてる麻冬さんに任せようと思っ
た。

「：じゃあ八幡くんの好きな食べ物とかあるかしら？」

「食べ物じゃないですけど：マツ缶が好きですネ：」

「マツ缶って何かしら？」

「マックスコーヒーの缶略してマツ缶です。知りませんか？」前に
ペットボトルも飲んだがやっぱり缶のほうが合っていたな。

「いえ飲んだことないわねそんなに美味しいのかしら？」

「一応今日も持ってますけど飲んでみますか？」

そう言うとう自分のカバンに入っていたマツ缶を一本取り出した。

「それじゃあもらおうかしら」

そう言い俺から受けとると封を開け一口飲むと

「！も、物凄く：甘いわね」そう言いながらも麻冬さんは残さず飲んで
いた

「練乳とか入っているのでまあ仕方ないかと：」

「でもまあ：癖になる味かしらね」そう麻冬さんが言ってくれたこと
に嬉しくなった。

「：このマツ缶？を使ってこんなメニューどうかしら？」

と麻冬さんが言うなり紙にメニューのイメージ図を書いていくの
を俺は見ていたが、これは：

—————

新作メニューの案を決めた次の日から新メニュー（仮）として三組
の考えたメニューをお客さんに出したのだが：

「莓香たちのメニューがかなり人気ね」

麻冬さんの言うとおりでそこかしこから桜ノ宮さんたちの考えたパ
フェの注文がきていた

「これは圧倒的だな」と秋月さんの言葉に他の皆も頷いていた。

「じゃあ勝者は莓香ちゃん・店長ペア に決まりね」と日向さんが宣言
するのを満場一致で拍手を送っていた。

「残念ね…八幡くんと初めて考えたのだけれど」そう麻冬さんが言ってくれたが

「仕方ないですよ…こんだけ圧倒的だと」そう返す以外なかった

「今度は勝ちましょうね」と麻冬さんに笑顔にそっぽを向いて頷くしか出来なかった。

—————

おまけ

桜ノ宮さんと店長の考えたメニューにそのまま決まるかと思って
いたが…

「がはっ！」そのメニューを店長が食べて倒れたのを見て桜ノ宮さんにどう作ったのかを秋月さんが聞いたのだが…

酢や塩など e t c . まさにドSパフェというようなものだった。

よくよく考えれば頼んでいたのは全員男性客だったなー

さすがに新メニューとしてそれは出せないからと女性客から人気
のあった俺と麻冬さんの考えたマックスコーヒーのアイスを上
にのせたコーヒーパーフェが新メニューに決まった。正直複雑な気分
だったが…まあ麻冬さんが嬉しそだったので良しとした。

友達としてなら… 前編

新作メニューも決まった数日後…問題です。私こと比企谷八幡は何処にいるでしょうか？

正解は…

「八幡くん待ったかしら？」

「いえ…だ、大丈夫でしゅ！」

はい…バイト先の店から一番近い駅にいます。しかも私服姿の麻冬さんと待ち合わせをして…

それは昨日の出来事だった

「八幡くん今いいかしら？」

仕事の休憩所で休んでいると麻冬さんが来て呼ばれた

「いいですけど…どうかしましたか？」

「この前に約束したこと明日にでも行かないかしら？」

この前…

「まさか忘れたって言わないわよね？」ゴゴゴツ

「ま、まさか！（汗）えーっと…あ、あれですよね…」

「そう、そのあれよ。つであれってどのことかわかってるかしら？」

「その（汗）…す、すいません！どのことかわかってません！」

さすがに分からず素直に謝ることにした。さすがに謝ったら許してくれるよ…な？

「はあつ仕方ないわね…約束っていうのは病院までおぶってもらった時にした約束よ」

病院につて…あっ！

「もしかしてアニメシヨップ教えてくれるってやつですか？」

「やつと思ひ出したみたいねそのことよ…つで、それを明日に行こうと思うのだけど大丈夫かしら？」

へっ？

「教えてもらうだけじゃなかったんですか？」

「違うわよ。ちゃんと店まで一緒に行こうってことだったのだけど…

予定入っていたかしら?」

「えーっと…実はあれしてあれがあるので明日は…」

「そう…予定があるなら仕方ないわね」

表情は変わっていないが何か後ろにしよぼーんって文字が見える

(汗) な、なんか罪悪感が…

「…よ、よくよく考えたら予定なくて明日暇してました　なんで明日大丈夫です」

そう言う

「なら良かったわ　それじゃあ明日店近くの〇〇駅前11時くらいでいいかしら?」にこつ

「は、はい…」

そして冒頭に戻る

私服姿の麻冬さんは仕事終わりによく見るが　普段よりもお洒落な気がする。

「それで?」

「はい?」

「はい?じゃなくて私の服を見てどうしたのかしら?」

み、見てたこと気づいておられた。つ、通報されるかな?

「いえ…普段よりお洒落しているように見えたので…でもよく似合っていると違います／＼」カァーツ

さすがに褒め慣れてないから顔が赤くなっているのが分かる…普段なら言わないのに今日に限って…は、恥ずかしぬ／＼

「そ、そう／＼ありがとう」ぷいっ

引かれることはなかったが横を向いて怒らせてしまったようだ(若干耳が赤いが…そんなに嫌だったのか?)

「とりあえず近くで食事してから向かわないかしら?」

12時になる前には腹ごしらえするってことだろうか?

「わかりました。と、とりあえず何処でお昼にしましょう?」

「近くにファミレスあるからそこでいいかしら?」

「大丈夫ですよ」

「それじゃあ行きましようか?」と言った麻冬さんの横に並んで歩こ

うとしたら…

「ちよつと？…その君話いいかな？」

警察の人に連れてかれそうになった。麻冬さんが大学生と分かるなりすぐに解放されたが大丈夫だろうか（汗）

そんなこともあり（その後2回の通報によりまたお巡りさんと呼ばれた）麻冬さんの言っていたファミレスへ来たのはいいのだが…

「八幡くん行くわよ…」イライラっ

そう言った麻冬さんの背中にははつきりと不機嫌ですって書いてあるように見えた。俺いつの間にテレパシー覚えた？

そして店に入ると…

「…い、いらっしやいませー…こちらのお席へどうぞ」

そう言った店員さんの顔も少し困り顔だった。

友達としてなら… 後編

ファミレスに入る前に不機嫌であった麻冬さんも店のスイーツを食べたら多少良くなったようで少し安心した。(もちろん昼御飯も食べた後でだが)ただ店員さんからレシートをもらったのは俺だったの
で俺が支払いをしようとする
と麻冬さんにジトーツ見られたが「ここは男の自分が払いますので」と言う
と渋々ながらも了承してくれた。
ファミレスを出た俺たちはまた歩き出したが、相変わらずの嫌な視線を感じたので早めにアニメショップへと向かった。

アニメショップ とらの○○

「それで来たのはいいけど八幡くんは何を買うつもりかしら?」
「そうですね…一通り回りますがとりあえず魔法少女フリルちゃんのDVDセットの予約を済ませます」

そう言う
と麻冬さんは目を輝かせ

「八幡くんにお願
いがあるのだけどいいかしら」きらきらつ☆

「は、はい?」いつもより目が輝いていたのでちよつとびっくりしてしまった。
某アニメのしいたけさんばりに目が輝いている…だと!

「そのDVDを見終わったら貸してもらえないかしら?実は最近グッズを買ってしまったて購入を諦めていたの」

麻冬さんはそう言いながら手を合わせながら首を傾げていた。正直可愛いすぎてヤバかったのは内緒だ。(下手に考えてしまうと麻冬さんの目が見れなくなってしまう／＼)

「それくらい構
いせんけど…何時になるか分かりませんがいいですか?」

「問題ないわ。それとも…」

麻冬さんが言葉
を区切ると

「一緒に私の部屋
で見る?」にこつ

「ふえっ?／＼／」

麻冬さんのセリフに一瞬変な声が出てしまった。麻冬さんの部屋に及ばれされるとか予想外過ぎて全俺がびっくりしていた。

「あの…その／＼ま、麻冬さん…その「冗談よ」へっ?」

「いきなり部屋とかさすがに無理よ からかいがいのある反応ありがとう」にこつ

そう言った麻冬さんの顔を見た瞬間不満なんかは全部吹き飛んでしまった。そんな顔するなんて…ずるいと思います／＼

DVDの予約を終え一緒にシヨップの中を回っていたが…普段より三割増しできらきらした目をしていて正直年相応より身長からしてこど「八幡くん？」 いえなんでもありません（汗）

しばらくはそんな状態が続いていたが魔法少女フリルちゃんのコーナーを見つめるなり二人とも一直線だった（周りの反応は正直気にしていない ここ大事！）

「フリルちゃんのグズって思った以上にあるんですね…」

「私も持っていないのも結構あるわね…次来た時は！」んふーっ

麻冬さんは興奮しておられる。本当に好きなんだなーと改めて実感した。

シヨップも見終わり帰ろうとしたが少しトイレに寄らせてもらい…しばらくして戻ると二人してフリルちゃんの話して盛り上がっている

「ほらっ見てよ奥さん…小さい子となんかアニメの話してる子がいるわ」

「ヲタクっていったかしら？子供に悪影響があるから別で話して欲しいものねー」

「最近だとそういったアニメに関して犯罪を犯す人もいるみたいだし…一緒にいる小さい子に悪影響よ」

そんな声が聞こえたのでさりげなく周りを見ると主婦だろうか。買い物帰りの井戸端会議というやつをしながら陰口みたいのを叩いていた。

見ていることに気づいたのかその人たちはすぐにその場を離れていたが、麻冬さんは少し俯いていた。

「麻冬さん…あんなの基本的にデマとかなんで気にしなくていいと思いますよ」

俺がそう言うと麻冬さんは首を横にふると

「そうじゃないの…八幡くんは今日辛くなかったかしら？さつきみたいな陰口もそうだけれど 今日だけで何回も変な目で見られたり、警察の人にも職質されて…私がつと身長が高くて大学生つて分かるくらいなら八幡くんがこんな陰口や嫌な視線感じなくて済むはずなのに…」

そう言った麻冬さんの顔は悲しげに俯いていた。

「ごめんなさい変なことって、八幡くんはこんな私でも仲良くしてくれて凄く嬉しいの でも私と仲良くしているせいでいろんな悪意ある目で八幡くんが見られてるのが私には…」ぐっ

そう言った麻冬さんは唇を噛みながらも目が潤んでいた。

「…ごめんなさい…さあ、そろそろ帰りましょう」

そう言うのと麻冬さんはまた駅に歩き始めた そんな顔は麻冬さんらしくないと麻冬さんの後を追いなから思っていた。

駅前に着くとすでに日は暮れ始めていた。

「じゃあ 今日ありがとうございます またバイト先で会いましょう」

そう言つて麻冬さんは改札へ向かおうとしていた

「ま、待ってください！少しそこにある公園で話…しませんか？」

さっきのことが頭から離れなくて麻冬さん呼び止めてしまった

「…少しならいいわ」

そう言うのと側にある公園へ一緒に歩いていった

公園に着くと麻冬さんが近くの自販機で飲み物をおごってくれた。お金を渡そうとすると「今日のお礼」と言つて受けとってくれなかったのでおごってもらうことにした。

「それで話つていろいろは？」

そう言つた麻冬さんは飲み物を飲みながらも真剣な顔をしていた

「ある男の子がいましたその子は通称ぼっちで 中学まで学校でよくいじめられていました」

中学の時 話かけただけで引かれ、落とし物を拾ってあげたらその子には泣かれたうえクラス中に謝罪要求をされたりした。

自分に話かけてくれる女子が嬉しくてその子に告白したが断られた。それだけでなくその後告白したことがクラス中に知れて笑い者

にされ見えないうようなところを蹴られたりした

「そしていつしかその子は他者を拒絶するようになり、一部の人以上を信じることを止めました。信じなければ傷つくことも傷つけられることもないと思っていたからです」

麻冬さんは静かに俺の話聞いてくれた

「そして高校入学前。その子にある変化が起きました。一部の人である信じれる人から。働かないか?と誘われ、その誘われた店で働いてみることにしました。初めは変な店長やゲーム好きなスタッフや年上だけ身長低いスタッフ。新しく入ったのは俺と同じで目付きの悪いスタッフ。正直初めからペース乱されました。でも…」

俺は一呼吸おくと

「でも俺にはそこが凄く居心地のいい場所になったんです。皆と過ごすあの店での時間が大切になったんです」

まあでもやっぱりホールは苦手ですけどね。と少し苦笑いをした。

「さつき麻冬さん言いましたよね?自分といると俺が悪意ある視線にさらされて辛いつて…でも正直そんな視線以上に麻冬さんと今日過ごした時間がその…楽しかったんです／＼」

少し恥ずかしくなり横を向いてしまった。元からこういったことには慣れていないのだから仕方ない!

「ファミレスでの麻冬さんの嬉しそうな顔やアニメシヨップと一緒にフリルちゃんのコーナーで目を輝かせたりフリルちゃんの話で盛り上がったたりそういうのが陰口や職質のことなんか忘れるくらい楽しかったんです」

麻冬さんは俺を見ながら目を丸くしていた

「つというか職質については麻冬さんといないときでもちよくちよくされてましたけどね」苦笑

目が腐ってるからってそう何回もされるなんて…。そんなのあんまりだと思えます。

「こんな目が腐っている俺ですけどこれから仲良くしてくれますか?」

そう俺が言うと

「なんか告白されているみたいね…でもありがとう 私も今日楽しかったわ」

そう言った麻冬さんの顔は今日一番の笑顔だった
駅に戻るときっきの独白で俺は顔を赤くして今にも悶えそうだった。

「まさか八幡くんにそんな過去があつたなんてね…しかもあんな素直な言葉が聞けるなんて」

「お、お願いしましゅ／＼／＼このことはご内密に…」

店の誰かに話されたら間違いなくしばらく仕事行けないほどだ。

「言わないわよ…そのかわりにまた買い物には付き合ってもらわね
♪」にこっ

「うっす」／＼／＼

そうして駅に向かった麻冬さんのカバンにはフリルちゃんのストラップが付いていた。そして俺の持つてる財布にも色ちがいの同じものが入っていた。

密かに芽生えた想い

麻冬side

「はあーっ…」

八幡くんと出かけてから帰ると、疲れていたのかため息をついた私は部屋に戻るとベッドにそのまま横になっていた。正直今の自分の姿は鏡では見れないだろう

初めて八幡くんを見た時は目が腐ってるなー くらいの印象しかなかった。

二回目はお店で会ったときはさすがに少し驚いた。予想通り私のことを年下だと思っていたようで大学生って知ると物凄く驚かれたが、反応が面白くてついからかいたくなってしまうほどだった。

キツチンに入る予定みだだったが、店長の気まぐれによりホールも担当することになってしまったようで心底嫌だという顔をしていた。

アニメ好きというのが共通点でよく私とフリルちゃん談義をしてくれる珍しい男の子（店長と話すときと別に逸れるのであまりしない）

私が足を挫いた時も他の人に心配させまいと言わずにいてくれた。まあ店長には教えて少し痛い目を見てもらっても良かったのだけだね…ふふっ♪

そして今日の買い物…一緒にお昼を食べ約束していたアニメショップを巡る 正直男性と一緒に出かけるとは思っていなかった。こんななりの私と歩くと皆嫌な目を向けられるからって離れていってしまう。正直そのほうが私も楽だったから今まで気にしていなかった。

でも今日の八幡くんと買い物は凄く楽しかった 途中で何回も嫌な視線を感じてはいたがそんなこと関係なくアニメの話にも付き合ってくれて嬉しかった。

そんな八幡くんが悪く言われていて正直自分と居ないほうがいいかとも思ってしまった。だけど一緒にいて楽しかった って照れながらも言ってくれた八幡くんがちよっと可愛いとも思ったり：／／

そしてその後の帰り道コンプレックスに関して話したからなのか気分よく帰っていると

「おや？麻冬さんに八幡くんではないですか」

声をかけられてから気づいたら店長と苺香が駅にいた。

「あらっ店長たちも出かけていたのね…」

「はい！先ほどまで秋月さんと夏帆さんもいたのですが、二人ともゲームセンターで遊んでから帰るようなので途中で分かれて店長に送ってもらっていました」

そう言った苺香は嬉しそうに話していたが…

「麻冬さんと比企谷さんもお出かけでしたか？」

そう聞いてきた苺香のカバンと後ろで八幡くんと話していた店長の携帯には色ちがいのクマのストラップが付いていた。

苺香が嬉しそうに今日のことを話していたが電車の時間が来たようになり乗場へと向かっていった。ただ店長の話を聞いていた八幡くんはかなり疲れた顔をしていた。大丈夫だろうか？

しばらくすると八幡くんの乗る電車も来たようになり乗場に向かっていたが

「麻冬さん…これ今日のお礼です」

そう言って私にくれたのは魔法少女フリルちゃんのストラップだった。しかもフリルちゃんの敵キャラとの二種類

「ほ、ホントにくれるの？」きらきらっ☆

正直もらえると聞いた瞬間からテンション上がっていた。

「今日のお礼ですから。これは麻冬さんのものですよ」首かきかきそう言った八幡くんは照れながら渡してくれた。こういうことに慣れてないみたいで初々しかったわ♪

渡した八幡くんがまた乗り場へと向かおうとしていたのを

「八幡くんちょっと待って」

そう止めてしまった

私の声が聞こえ八幡くんが振り返ったときに

「こっちは八幡くん…持っていて欲しいわ」

そう言つて敵キャラのほうのストラップを渡した

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

部屋に帰ってきてから何故渡したのかは私自身わかつてはいな
かった。だけど…

「友達からなら…なんていいかもしれないわね♪」ふふっ

そう思わず口に出してしまうほどに今日のことが凄く大切な思
い出になった気がした。

18禁とお姉さん

麻冬さんとデ…出かけた翌日いつものように店に行くと

何故か桜ノ宮さんが机の下に隠れていた。な、なんだこれ（汗）

「あつ…八幡くんおはよう」 そう言った麻冬さんの手には紙袋があった。

「おはようございます…あの桜ノ宮さんどうしたんですか？」

「あ…原因はこれよ」 そう言った麻冬さんが紙袋をこちらに見せてきた。紙袋になんかあるのか？

「お客さんの忘れものみたいなんだけどその中身を匂香見ちゃったみたいでそれからあんな感じなのよ」

紙袋の中身見ただけで？そんなにヤバいものでも入ってたのか？

「あつ八幡くん来てたんだ おはよう」

麻冬さんと話していると手にモップを持った日向さんがこちらにやってきた。つというかいつの間にか日向さんまで名前呼びに… まあいいけど

「おはようございます…日向さんはこの紙袋の中身知ってるんですか？」 そう言つて俺が紙袋を指差すと日向さんは

「それ？なんか同人誌みたいなのよね…でも18禁みたいで麻冬さん見せてくれないのよ」

同人誌か…なんか納得した。桜ノ宮さんみたいな箱入り娘のような人には刺激が強いはずだ。まあ自分も読んだことないが…

「八幡くんも未成年なんだから見ちゃだめよ」

そう麻冬さんは言っていたが…正直あまり興味があるわけではなかった。麻冬さんに一言言つて更衣室へ着替えに行った

店が開き、しばらくすると休憩時間になったので休憩所に入ると…

「あつ」 紙袋の本を見ようとしていた日向さんに遭遇した。なんでそんなに見たがるんだろうか…

「なんだ八幡くんか…麻冬さんならどうしようか」私がかどうかしたかしら？」と…へっ？えつと…な、なんでもありません！」

そう言った日向さんはすぐに紙袋から手を離した。

「まったく…なんでそんなに見たがるのかしら…苺香を見なさい。この紙袋からあんなに距離を離しているくらいなのよ」

そう麻冬さんが言ったほうを向くと…頭から湯気を出している桜ノ宮さんがいた。正直気づかなかった…桜ノ宮さんはステルスヒツキーをいつの間覚えたんだ?!

「だって…気になるじゃないですかーあそこまで苺香ちゃんが反応するなんて 八幡くんは気にならないわけ?」

「特には…ただ早く取りに来て欲しいと思うくらいですかね」

正直早く取りに来ないと燃やされるか持つてかれそうだおもに燃やすのは桜ノ宮さん、持つていきそうなのは店長か秋月さんだな…なんか秋月さん詳しかったって麻冬さん言ってたし

「八幡くんホントに高校生?普通ならもつと反応するものじゃないの?」

「いえそうだったのに興味ないというより地雷原に自ら足を入れたくないの…」

見た瞬間麻冬さんや桜ノ宮さんの反応が変わるのが目に見えている。桜ノ宮さんの場合蔑んだ目で見られそうだ 俺は店長みたくMじゃないからそれで興奮したりしない。

そんなやり取りが一週間ほど過ぎるがまだ紙袋の引き取りは来なかった。店の入り口に麻冬さんが書いた忘れ物の紙を貼ってみたりしたが効果はいまいちだった。紙には本に斜線が入り下に自費出版本と書かれていたが確かにこれならわかる人にしか伝わらないさすがは麻冬さんそこに痺れる憧れるー!

あと桜ノ宮さんもお客さんに聞いて回ったようだが…本の内容がだいたいわかってしまった。

そうしていると店も閉まり片付けをしている時だった。

「あの一…すいません」

そう言いながら入ってきたお客さんを見ると眼鏡をかけているが美人なお客さんが来ていた。

「あの一…閉店してしまいました…」

そう俺が言うとその人は首を横に振ると

「あの…こちらに忘れ物があり伺ったのですが…」

そう聞いた俺はさすがに絶句した。いやいや！まさかこの人の言っているのが同人誌と決まったわけではないし…違ってる可能性も十二分にある…と、とりあえず聞いてみないことには始まらない。

「えつと…忘れ物というのは…」

「はい…その、店に貼られていた自費出版本なのですが」

うん、間違いなく持ち主でした。後ろを向くと桜ノ宮さんも聞こえたように…絶句していた。